

森口奈良吉と「吉野離宮」(その一)

▼はじめに

この「通信」にたびたび登

場する森口奈良吉(一八七五

~一九六八年)は、奈良県の

東吉野村に生まれ、奈良女子

高等師範学校教員(現・奈良

女子大学)から春日大社禰宜

(ねぎ)に転じた後、長く神

職にあつた。また、永年の考

証によつて自身の氏神でもあ

る郷社蟻通神社(丹生川上神

社)を官幣大社に昇格させる

に至つたことで知られて

いる。

しかし、奈良吉の丹生川上

から対立しつも、やがて人

々の記憶から去つていった。

吉野離宮は末永雅雄による

発掘調査があり、奈良吉の丹

生川上は、掘られなかつた。

「東の瀧もどろに夢の回淵

蟻通めず丹生の川上」と歌

つた森口の吉野離宮への執念

のこだわりは、いまだ夢と去

ついてない。そうして今年二

〇一八年は、森口奈良吉没後

五十年、また奈良吉が『丹生

川上神社考』を著してから一

〇〇年になる。

な ら 民俗通信

280 西村 博美

▼吉野離宮は、宮瀧に?

「吉野離宮」については、坂

本太郎他校注の『日本書紀』

(岩波書店)によれば「七・

八世紀にしばしば利用された

離宮。奈良県吉野郡吉野町宮

瀧の邊かという」とされてい

る。

雄氏も、本紙に記事を寄せて
いる。

「齊明天皇が六五六年に造
當した吉野宮、大海人皇子が
壬申の乱の挙兵地に選び、持

統天皇が三十余回を訪れた

宮、それぞれの遺構の中心地

が、少しづつではあるが西方

に移動しているとも明らか

になつた」(奈良新聞、
六月六日)。

の遺跡」(奈良県史蹟名勝天
然記念物調査会、一九四四年)
で、

①吉野離宮との問題を看過

することが出来ないこと

②それをもつて)吉野離

宮の遺跡だとするにはなお幾

多考証の余地があること

③むしろ石器時代以来の遺

構遺物の現存することは、こ

の地に悠遠な年代にわたる文
化の存続を実証する

が圧倒的であつたことからも
窺(つかがう)ことができる。
未永は、「宮瀧の遺跡(前
掲書)で、『吉野離宮の遺趾

を宮瀧に求むる論攷」として、

澤潟久孝の『万葉集新釈』を

筆頭に、佐佐木信綱、山田孝

雄、次田潤、武田祐吉、金子

元臣、斎藤茂吉らの名を揚げ

ている。一方、「宮瀧にあら

すとする」者は、森口奈良吉

の他、豊田八十代の一人のみ。

さらに、ここには名前はない
が歌人の土屋文明は、「(丹

生川上説の)とるに足らぬ」

と記している。

また後年、これらの調査を

回想する形で、「けつきよく

宮瀧の発掘は、……

吉野離宮跡の存否さ

え確認するにいたら

なかつた」。

「宮瀧の吉野離宮

跡として支持する可

能性を、遺跡の上か

らはかえて、弱い

かも知れないが、文

獻の判断では、むし

ろ積極的に支持され

るものがあると考え

ている」と言う(考

古学の窓)一九八六年)。

森口奈良吉は、丹生川

上の地とするが、宮瀧説の方

が妥当と思う」としている

(『壬申の乱』)。

さらに、奈良吉とも親父の

あつた折口信夫は、宮瀧説を

否定する一方で、同じ丹生川

上でも「(上社の)川筋(蜻

蛉(せいれい)の滝付近)に

吉野宮址があつたのではないか」と語っている(『万葉集

』)。

奈良吉説は、まさに劣勢とい

わざるを得ない。

森口奈良吉は、水の神信仰

の拠(よ)り所の地として、

ミツハノメノカミ(因象女神)

を祀(まつ)る吉野郡小川村

(現・東吉野村)にある蟻通

神社に置いている(『丹生川

上神社考』『吉野離宮』)。

また、折口信夫によれば、

「水の女」(『古代研究』)

の中で、「みつはのめ」は、

大和宮廷の伝承では、丹生神

と「みぬま神」との習合によ

るものとされており、「湯坐

・湯母(ゆえ・ゆも)」とし

て禊(みそ)ぎに関わる仕事

を持ったと考えられるところ

である(『水の女』『古代信仰』)。

奈良吉は、応神天皇をはじ

めとする歴代天皇の吉野離宮

の行幸は、決して觀光や保養

のためではなく、水の神とさ

れる丹生女神(ニフツヒメ)

に対する篤い信仰からであつ

たと見ている。天皇はここで、

生り物の豊穣を祈り、日照り

には雨を、霧雨(りんう)(長

雨)統きの折には止雨を祈つ

た。

森口奈良吉氏は、丹生川

の櫛原考古学研究所による発

掘の成果にも触れつつ、「宮

瀧遺跡が吉野離宮であること

の可能性はますます高まつ

た。

かくして、持統天皇があつた折口信夫は、宮瀧説を

否定する一方で、同じ丹生川

上でも「(上社の)川筋(蜻

蛉(せいれい)の滝付近)に

吉野宮址があつたのではないか」と語っている(『万葉集

』)。

奈良吉説は、まさに劣勢とい

歴代天皇、行幸の地



丹生川上神社社頭(『丹生川上神社』)
丹口奈良吉著(1975年)